

Jalan Jalan インドネシア

第62回「パプア州ビアク島に残る太平洋戦争の戦跡 西洞窟

野外に雑然と陳列された砲弾や日本兵の遺品など その2」

パプア州ビアク島の飛行場、海岸を見下ろす高台の一角にある旧日本軍の司令部跡、西洞窟のある場所には野外に多くの武器、砲弾、日本兵の遺品などが無造作に展示されている。

道路を挟んだ反対側には小さい建物があり、ここにも戦争を伝える数々の遺留品が屋内に保管されているが、普段は施錠されており、敷地内にある西洞窟を管理する現地パプア人夫妻が在宅していれば頼んで鍵を開けてもらい、内部を見学することができる。

西洞窟に続く道が始まる場所は広い駐車場、管理人の自宅、簡単な応接用の東屋があり、周辺には銃弾の跡がおびただしいドラム缶や砲弾、銃弾、手りゅう弾などという武器類に加えて、葉ビン、飲料ガラスビン、ヘルメット、ベルトのバックルなど日本への遺留品も展示されている。

ビール瓶の底部には「キリンビール」の字があり、間違いなく日本から運ばれ、激戦のビアク島で戦火の合間にほっとしながら兵士たちが日本の味を楽しんだことを想起させる。どんなに母国、故郷、親兄弟など同胞への思いをつのらせたことだろう。あるいは覚悟の最後の突撃を前にした訣別の杯だったのかもしれない。



西洞窟に向かう場所は不発弾などが並べられ戦史資料館になっている（左）



当時の武器やドラム缶の残骸も無造作に並べられている（右）

西洞窟を管理するパプア人夫妻によると、かつては戦友会の人々などビアク島にゆかりのある日本人の訪問もあったが、太平洋戦争もすでに遠い過去のものとなり、日本人が訪れることは近年珍しくなったという。

地元ビアク島の小学生やインドネシア軍、警察関係者が当時の歴史を知ろうと訪れるケースが増えているという。

現在は折からのコロナウイルス感染拡大防止策でビアク島、パプア州への入境は制限されており、もともと遠隔の地だったビアク島はさらに遠く、近寄り難い地になってしまっている。

日本の厚生労働省が主体となった日本兵の遺骨収集事業がビアク島でも何度か実施され、島内で発見された多くの遺骨が西洞窟の敷地内に設けられた「仮安置所」に保管され、日本からの派遣団が訪れると同行している遺骨鑑定の専門家とインドネシア側の鑑定専門家による共同作業で遺骨が「日本人である可能性が極めて高いかどうか」を見極める。その後茶毘に付して白木の箱に収められ、空路帰国して東京千鳥ヶ淵の戦没者墓苑に収められる。

しかし近年はそうした作業が滞っているようで、まだまだ多くの日本への遺骨が朽ちながらも祖国へ帰る日をじっと待っている状況が続いている。

この西洞窟と並び戦時中、日本軍のもう一つの拠点となった東洞窟という戦跡も残されている。しかし東洞窟は西洞窟に比較すると規模が小さくさらに不便な場所にあり、周辺やアクセスもほとんど整備されていないため、ほとんど訪れる人はおらず荒れ果てているという。



洞窟周辺で見つかった不発弾や日本軍の飯盒（左）



收拾されたビール瓶の底部にはカタカナでキリンビールと書かれている（右）

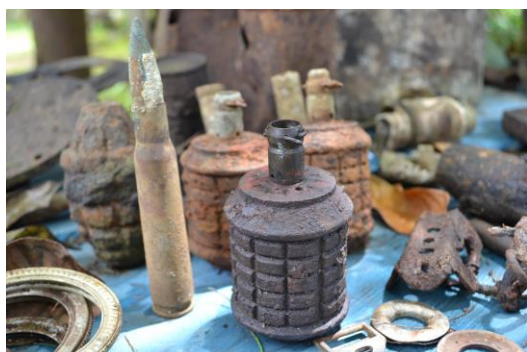
戦争は国家が発動し、それに殉じた戦死者は職業軍人であれ、応召兵であれ、民間人であれ、徴用された外国人であれ国家が責任と礼をもって葬るのが筋である。

米国はハワイに国防総省傘下の組織「戦争捕虜、戦中行方不明者捜索統合司令部（DPAA）」がこれまでの戦争で戦死した米兵の遺骨発掘、DNA鑑定で遺族への返還を続けている。その合言葉は「全兵士を祖国へ帰す」である。

これに対し日本は厚労省が中心になるも各戦地でバラバラに行われていた遺骨収集事業が民間組織「日本戦没者遺骨収集推進協会」に統合され、集中的に実施されるようにはなっていたが、ほとんど進展していないのが実情という。

インドネシアもビアクなどパプア地方を中心に2020年1月にも日本から調査団が入る予定だったというが、インドネシア政府の2019年10月の内閣改造、さらにこのコロナ禍などで予定が大幅に遅れ、再開の目途も立たないのが現状という。

一日でも早く、一人でも多くの日本兵戦没者が故郷に帰れることを祈りたい。



手りゅう弾に小銃弾などの遺留品（左下）日本兵が使っていた水筒、どんなに水が飲みたかったことだろうか（左上）隣接する屋内資料展示所（右）